

二〇二三年度 卒業論文

南米における日本仏教の受容

―浄土真宗を中心にして―

コピー 厳禁

L200010

石井 眞依子

目次

序論	1
本論	2
第一章 日本人移民史	2
第一節 渡伯した日本人移民	2
第二節 日本人移民と宗教の動向	5
第二章 浄土真宗本願寺派の南米開教	8
第一節 南米開教区とハワイ・北米開教区	8
第二節 ブラジル以外の南米開教区	3
第三章 ブラジルの宗教と浄土真宗	5
第一節 ブラジルの宗教	5
第二節 浄土真宗とキリストにおける救済	7
第四章 南米における伝道	2
第一節 現在行われている南米開教	2
第二節 今後の南米伝道とその課題	4
結論	6

コピー厳禁

註
参考文献

コピー厳禁

序論

浄土真宗の海外開教は、主にハワイ・北米・南米の三つの地域で行われている。今回、南米開教区に焦点を当て、南米における日本仏教の受容と、今後の伝道の可能性について研究したい。この分野に焦点を当てた理由としては、ハワイ・北米に関する資料やその実情を示すものは多く存在しているが、南米開教区に関するものは少ないからである。そのためどのような経緯、環境の中で開教が進められてきたのかを明らかにし、現地における仏教の実情と今後の国際伝道のあり方を検討したいと考えたからである。

海外開教の始まりは、日本人が海外へ移民として渡ったことである。ハワイ・北米においては、英語での伝道が早い段階から日系人間で試みられ、白人伝道も少しずつ行われていた。近年の北米では、日本における仏教とは違うあり方が存在している。仏教に対する関心も高まっている中で、現在北米開教区では、坐禅などの実践的な仏教を求めて寺院を訪ねてくる人が多いことをカナダ開教区の開教使に伺った。¹そのため浄土真宗では坐禅を行わないが、日本仏教、浄土真宗への一つの入り口としてそれを行う寺院もある。

アメリカ、ブラジルはともに移民によって構成された国であり、元々の国の基盤となっている宗教はキリスト教である。現在両国ともキリスト教は国教ではないが、国民の考え方や国の基盤となっているだろう。そのような場所で生まれ育った人々に対し、どのように伝道を行なっていくのかということが、浄土真宗の国際伝道において課題となっていることではないだろうか。同じキリスト教を基盤とした国であっても、人種や人々の宗教観は大きく異なっており、海外伝道を現地の人に対して行う際は、方法を一つにするのではなく、人々の生活様式

に応じて変容させていく必要があると考えられる。

そこで、これからの浄土真宗が、元々浄土真宗に縁のない非日系人に対して新たに伝道をしていく上で考えられる課題、そして現在浄土真宗の門徒であり海外で生まれ育った人々と共に寺院を存続させることへの課題は何かを明らかにして、今後の真宗伝道の可能性を考えていきたい。

本論

第一章 日本人移民史

第一節 渡伯した日本人移民

日本仏教各宗派の開教の歴史は、ハワイやアメリカと同様、ブラジルにおいても日本人移民の歴史の中に存在している。日本仏教の各宗派は日本人移民とともに変遷を見させてきた。はじめに渡伯した日本人移民の歴史を概観する。

最初の日本人移民は、「元年者」と呼ばれる、明治元年（一八六八）にハワイ及びグアム島へ集団で移民として渡った人々である。²やがてハワイを基盤にしながら北米大陸へも渡った移民たちは、排日を強く受けた。この排日は、浄土真宗の北米における伝道活動において布教の足枷となった一要因であると考えられる。

当時のセオドア・ルーズベルト大統領（一八五八～一九一九）は排日運動を受け、ハワイ、メキシコ、カナダからの再移住者のアメリカ入国を禁止する措置を打ち出した。このアメリカへの再移住禁止策によって、ハワイの移民はカナダへ流れたが、都心部のバンクーバーで排日が起きた。アメリカ、カナダへの道が閉ざされた末に日本人移民が次の移住先として目指した所は、南米ペルーである。

ペルーは、労働者への賃金が北米よりも低かったが、日本側は移民事業を継続させるために移民計画を立て、ペルーで一八九八年に契約移民の導入を認める大統領令が出されたことによって移民が送られた。しかし、ペルーにおいては国内情勢が不安定であったこと、労働環境が良好でなかったことなどから、移民事業の成果が振るわなかった。そのため、後にブラジルへ移ることとなった。

渡伯した日本人移民は最初に収容所へ集められ、その後地域ごとにコーヒー農場への入植が進められた。現在は廃線となっているが、当時の鉄道路線に合わせて開拓が進められた。しかし、過酷な労働環境によって日本人移民が心身の疲れをきたし、各移住地で騒動を起こした。だが元々の奴隷制度が廃止されたため、奴隷に代わる労働力を必要としていたブラジルの思惑と、北米への扉が閉ざされたことにより、日本はブラジルに移民を送るほかなかったと考えられる。その後、第一次世界大戦が起きると、ヨーロッパ系移民が減少し、より多くの日本人が渡伯した。その頃になると、日本人移民たちは次第に、彼らの子供たちの教育について考えるようになった。移民として労働し、将来は日本での生活を念頭に置いていた日本人は、自分の子供が帰国した際に不自由のないよう、子供たちに日本語で教育を受けさせたいと考えていた。そこで、日本人同士で日本人会というコミュニテ

イを作り、小さな学校を建て日本語教育を子供たちに行った。その後日本人移民が増加する中、ブラジルの国内政治は激動期を迎えていた。特に一九三〇年代以降、ナショナリズム政策が提唱されてから、³ブラジルの政治は移民に対して同化政策を進め、一九三四年には移民二分制限法が政策として掲げられた。この法は同じ国出身の者が集まり、その国の生活習慣や文化がブラジルの一部分を支配することを防ぐためのものである。移民の人数や宗教は問題視していなかった。⁴結果としてこの法は適用されなかったが、集団で生活していた日本人は動揺したと考えられる。このような状況下で、日系社会がブラジル内で孤立することへの懸念と、日系社会の中でブラジルへの同化を望み、自己をブラジル人と自覚する者⁵が日系社会で孤立することへの懸念という二つの立場が日本人移民の中で存在していた。

この時代の日本仏教各宗派の動向は、大きいものはみられないが、以下のような活動が見られた。渡伯した日本仏教の中でも本門佛立宗、真言宗、浄土真宗の宗教者たちが戦前のブラジルにおいて仏教伝道に尽力した。彼らの中には宗教の興隆を図り「宗教村」の建設を目指した者がいたが、先述したような国内情勢などにより実現できなかった。しかし、日本人移民の数が増加し、それと共に日本の各仏教宗派の信者が増加した。これにより寺院が相次いで建設され、僧侶も日本から渡伯した。またある地方では仏前結婚式が行われるなど、それまでに行われていなかった仏教的行事がこの時期から行われるようになり、宗教活動の高まりが少しずつ見られるようになった。

浄土真宗の布教活動が本格的に開始されたのは太平洋戦争後十年以上経過してからのことである。ただ、戦前

から浄土真宗の法話会が行われていたが、日本語教育が禁止⁶。されている中で法話会を行うことは、北米のようにいつ排日を受けるのかという懸念があり、大々的にできなかったことが考えられる。

やがて戦後、ブラジル在住の日本人の中で対立が生じた。日本の太平洋戦争での無条件降伏を受け入れず、日本が勝利したというデマを受け入れ、それに乗っ取った言動を行う集団である「勝ち組」と、反対に敗戦のニュースを事実として受け入れ、それ相応の言動を行なった集団である「負け組」⁷の二つの集団である。これは、日系人間で日本の敗戦を勝ち負けのどちらかで捉えるのかというものである。日本の国内情報を伝えるラジオや邦字新聞があつたがそれらは信憑性に欠けており、日本が戦勝国である立場を取る者と日本が敗戦国である立場を取る者に分かれたのである。これにより、殺人事件やテロ⁸。が起こるなどの混乱が生じた。このようにブラジルの人口の一部分を占める日系社会が混乱しており、「勝ち組」に仏教徒が加担したという疑いが持たれ、⁹。ブラジル人に嫌悪感を抱かせた。戦後直後の日本人間の対立は一九五〇年頃まで続いた。¹⁰。日本仏教各宗派がそれぞれ次第に正式な開教を始めた時期とこの混乱期は重なっており、各宗派はいかに布教を行うべきかという葛藤が生じたと考えられる。このような移民史を背景に、日本仏教各宗派は布教を行ってきたのである。

第二節 日本人移民と宗教の動向

戦前の日本では、認可制の宗教制度だったため、日系宗教の数は少なかった。ブラジル国内における宗教事情としては、キリスト教カトリックが国教に等しい位置にあつたが、憲法によって信教の自由は認められていた。

ブラジルは日本人移民の大半が仏教徒であることを承知していた。このことから日本人がブラジルで仏教徒であると標榜することに問題はなかった。だが日本の仏教教団はカトリックに対して遠慮の姿勢をとり、布教を自粛していた。¹¹ 実際に排日を受けていないが、¹² 北米のように排日を受けることを懸念し、日本仏教の教団が活動を遠慮するだけでなく、カトリック以外のキリスト教の牧師が渡伯することも懸念された。このような制限が見られることから、当時大々的な宗教活動を行うことは出来なかったと考えられる。やがて太平洋戦争が勃発すると、ブラジル国内で外国人の言動が監視されるようになり、さらに活動が困難となったのではないだろうか。

太平洋戦争後も、日本の外務省や現地の日系メディアは、日本の宗教団体全ての布教活動を自粛すべきとした。外務省の意向に加え、現地の日系メディアは日本仏教を非難する記事を作成した。例えば、大梵鐘が日本からブラジルへ送られる際、邦字新聞はこの件に関してカトリックの国に大梵鐘を送ることは非常識であると述べた。¹³ なぜなら、外務省が日本から仏教の僧侶が渡伯することを禁じたことよって仏教が制御されていたからである。これに対してブラジル側は、ブラジルは宗教の自由を認めているため仏教が梵鐘を使用することは問題ないと回答した。¹⁴ このように、ブラジル側は日本の仏教が国内に存在することを認めていたが、日本側が活動の自粛を促していたのである。

やがて日本の宗教制度が認可制から届け出制となったことにより、国内で新宗教が増加し、渡った先のブラジルでもその傾向が見られた。仏教においては、一九五八年に伯国仏教各宗連合会が設立された。これは、本門仏立宗、浄土真宗本願寺派、真宗大谷派、浄土宗、日蓮宗、曹洞宗といった日本仏教宗派の代表者同士が連携をと

って組織を運営し、涅槃会や成道会などの追悼法要等の行事を行って、互いに懇親を深めようとするものであった。日本人移民の宗教は仏教が最も多く、その中でも真宗系が多数を占めていた。その理由は、日本の中でも真宗門徒が多い地域から多くの人々が渡伯したからである。

戦後、日本仏教の各宗派が開教を進め始め、次第に各仏教の宗派間に競争意識が芽生え始めた。この競争の詳細は不明であるが、この頃の日本人移民の宗教観はどのようなものであったのだろうか。『仏教大年鑑』によると、在伯仏教各宗連合会は、ブラジルの一般社会における日本人の宗教観を以下のように示している。

- ① 日本移民は自己の宗教を白紙に置き換えている。
- ② 日本は仏教国であるにもかかわらず、移民は一世さえ仏教への関心が薄い。
- ③ 日本移民の多くは自分の宗教である仏教を理解し、批判し、その上で他の宗教に転向するのでなく、盲目的転身を行なっている。従って、転身後も迷い、新宗教の囚になる者が極端に多い。
- ④ 宗教的信念の確立が少ないので、2、3世に対する影響力は稀薄である。
- ⑤ ブラジル社会の特殊事情と、以上の4項の理由により、遠からず日本語は亡びるし、仏教(日本本来の日本語による)は無くなると考えられている。¹⁵

このほか、浄土宗別院の建設を目標に渡伯し、ブラジル各地を視察していた長谷川良信(一八九〇―一九六六)の現地調査記録¹⁶によると、「仏教に限って日系人の多くが信仰している宗派をみると、浄土真宗がもっとも多く」¹⁷と述べられていた。地域によって差は見られるが、全体としては仏教徒の中では浄土真宗を信仰している者が最も多かったことが予測される。この浄土真宗の内訳として、本願寺派、真宗大谷派、あるいは他の宗

派の中でどの宗派が最も多かったのかは分からなかった。また宗教に關係なく、宗教を信仰している人に現在の宗教を信仰している理由の調査結果では、「家族で信仰しているから」という理由が最も多い。その中で、ブラジル社会への同化が進んでいる場合と、進んでいない場合では信仰している宗教が異なっている。ブラジル社会への同化が進んでいる日系人の間ではキリスト教の信者が多く見られる一方で、同化が進んでいない日系人の間では仏教の信者が多く見られた。また、同化の進み具合によっては宗教を信仰する理由にも違いが見られ、大きく分けると生きがいや精神の拠り所として宗教を信仰する場合と、家族や知り合いの影響で信仰する宗教や宗派が決定される場合が見られた。¹⁸

以上のことを踏まえると、日系人の中での仏教の興隆は見られるが、非日系人に対する日本仏教の伝道は見られない。また、同化が進んでいる地域では現地の信仰の大半を占めるキリスト教徒になることが多く、仏教は日系社会を中心にしてそのコミュニティの中でのみ広がったと言えるのではないだろうか。

第二章 浄土真宗本願寺派の南米開教

第一節 南米開教区とハワイ・北米開教区

前章では日本人移民史と宗教及び日本仏教各宗派の動向について概観してきた。日本人移民が渡った国の事情によって日本仏教のあり方がそれぞれ異なっていたことは想像に難くないだろう。ここからは、浄土真宗本願

寺派における開教について、特に南米と北米の違いについて考察していきたい。

南米における浄土真宗本願寺派の活動は、先述したように戦前に始まる。教団による本格的な開教が始まる前の戦前期、篤信者による法話会が行われていた。一九三〇年代以降には生駒真澄（二八八八～一九五八、以下「生駒」と記す）や原中哲丹（生没年不詳、以下「原中」と記す）といった僧侶らを中心に布教活動が行われていた。

生駒は日本で布教使として活動を行っていたが、ブラジルに仏教徒がいるにも関わらず指導者がいないことを渡伯した者から聞き、布教を目的として、家族と共に表面上では移民として一九二八年、四〇歳の時に渡伯し、労働を行いながら法座グループ「慈光会」をブラジル南東部サンパウロ州レジストロ市に設立して布教を行った。

この結果門徒数が増加し、¹⁹生駒自身が入植した耕作地の地域のみならず、他方面にも布教の範囲が拡大された。また生駒は自ら開教総長となることを望み、戦後には本山に向けて、「終戦後ブラジルに信教の自由が認められ、我々は一早く、サンパウロに仏教会を結んで寺院建設中であるので、之を別院として初代主管に生駒真澄を御任命願い度い」²⁰という文書を送っている。だが、門徒からの反感や生駒に対する中傷記事を現地の邦字新聞が作成したことによって、本山が生駒を開教総長へと任命する判断を見合わす要因となった。そのため、生駒の望みは叶わなかった。後に本山から派遣された初代開教総長となる渡辺静波（一九一三～二〇〇四、以下「渡辺」と記す）は、自身の私家本『憶若』²¹にて生駒を「開教受難の最たるものとして生涯忘れる事が出来ないのである」²²と述べており、浄土真宗を布教しようとするが故の衝突が起きていたと見られる。だが生駒はその後ブラジル初の浄土真宗寺院として「光明寺」をサンパウロ州ノロエステ地方カフェランジアに設立し、公的に浄土真

宗の南米開教が始められるまでの間、浄土真宗とブラジルの接点を作った人物として知られる。

生駒の活動期の後に活動を行なった原中は、仏教会を設立したり、門徒の署名を得て開教嘆願書を本山に提出したりするなどの活動を行い、布教に携わった。このような生駒や原中の現地での布教活動を受け、後に開教教務所長となる四邨覚勝（生没年不詳、以下「四邨」と記す）が仏教布教を目的に渡伯した。四邨は開教教務所のあるサンパウロ近辺に住む僧侶らの協力を得て、教団の統一や寺院の土地費用の要請などを目的として、本願寺派門主夫妻の南米御巡教を申し出た。後にこの申し出は実現した。やがてこれを機に、寺院や仏教会が次々と設立された。当時の浄土真宗本願寺派の開教について、『仏教大年鑑』には、

各地に駐在の開教使をして多角的教化を展開、大いに活躍しつつあり。又、機関紙『ともしび』を発行、仏教教理のポルトガル語翻訳、ドビエ・コポラ氏等を中心とした日伯仏教研究会を結成して、伯人教化、ブラジル人に対する布教に努力している。^{2,3}

と述べられており、本願寺派の活動の興隆が窺える。四邨の辞任後は、渡辺が本山から派遣された。

また、ブラジルで浄土真宗が興隆していく過程で、寺院及び教団の名称の中に「本派」という言葉を使用することに關しての議論が生じた。南米開教区では布教開始当時、浄土真宗の本願寺派と大谷派が宗派の違いを明確にするのではなく、双方が協力して伝道を進めることを試みていた。よって、寺院の名称による東西の区別化は行われなかったようである。宗派を明確に分離せず、宗派関係なく一体となって伝道を進める形が取られていたと考えられる。

だが、真宗大谷派南米開教監督部の資料『南米開教三五年誌』の「真宗大谷派のブラジル開教前誌」のブラジルにおける開教の実情が述べられている箇所には、「本願寺派の独占」²⁴という記述がある。また現地の真宗門徒に関する記述には、それ以前について「当時のブラジルの真宗門徒は、東西というような宗派意識は稀薄で、どの法座にも参詣していた」²⁵とある。戦後宗教が認可制から届け出制となり、宗派の区別が明確になっていった。戦後の日系人内の混乱の中、東西本願寺に於いても競争意識が芽生えたと考えられる。これによる伝道に対しての大きな弊害は見られなかったようであるが、寺務にあたっていた者の間では混乱が生じていたようである。同資料に掲載されていた日本仏教各宗派の事業施設の数を表した資料²⁶によると、日本仏教の宗派が関係している施設や組織の数は、先述した在伯仏教各宗連合会に加盟している仏教宗派の中で浄土真宗が最も多い。事業施設に関しては、長谷川良信が浄土宗布教以前に訪れたブラジルでの調査記録²⁷の中で、既に渡伯した日本仏教の各宗派の活動に対する見解を幾つか述べている。その記録には宗派は不明であるが、浄土真宗の活動に関する記述が多数散見されることから、活発な活動が行われていたことが窺える。浄土真宗が以上のように興隆を見せていた頃、盆などの行事だけでなく、本願寺派門主夫妻の南米御巡教が実現されたように、各仏教宗派も本山から有力者が渡伯し、それまでは日本仏教という一つの括りの中で各宗派が活動を行っていた状態から宗派の区別が明確となっていた。やがて日系人たちは自分の家の宗派を意識し、宗派への帰属意識が芽生え始めたのである。

本願寺派教団による本格的な布教活動が開始された初期段階の活動は、戦後一九五〇年に開教教務所、一九五

三年に南米開教本部が設立されたことである。こうして宗教的な建設物が設立されたのは、一九五〇年代以降のことであるが、先述したように戦前から浄土真宗本願寺派はブラジルの日系人の間で存在していた。行われていた法話会には「ブラジルの親鸞」と呼ばれた伊藤空真(本名…伊藤助一、一八八一～没年不詳、以下「伊藤」と記す)などの熱心な門徒が参加していた。この法話会が行われていた背景は、『平野廿五周年史』を元に述べると、移民の中で将来に対する不安や、働く上での苦しさを癒すために仏教を求めた者たちが、彼らの集まりを「同心会」と名づけ、温厚であるという名の知れていた伊藤を招いたことにある。²⁸伊藤は毎月一回、巡回で法話を行い、僧侶のような役割を担っていたと考えられる。単発的な宗教活動は浄土真宗だけでなく他宗派でも行われていたが、そのような仏教的な活動を行なっていく中で、やがて現地の半俗半僧の僧侶と、一九五〇年以降に本山から派遣された開教使が主導権を争い、開教責任者の選定などの様々な問題が見られた。

また、禅宗僧侶の南米巡回記録²⁹には、浄土真宗本願寺派が優秀な僧侶を派遣していることが述べられており、教団側が開教を積極的に進めようとしていたことが窺える。

一方、ハワイ・北米開教区では、仏教が日本人のアメリカ化を阻害する最大の障害物³⁰として見られ、日本語での説教が一時禁じられた。³¹南米と違い、現地で用いられている英語での英語伝道がされていた背景は、戦時中、強制収容された日系人たちがキャンプの中で伝道活動を行っており、アメリカに生まれ育った日系二世の活動が盛んになったことである。この英語伝道は、後のアメリカ仏教と関連するものであるだろう。

ハワイの開教総長であった今村恵猛(一八六七～一九三二、以下「今村」と記す)によって、アメリカにおけ

る浄土真宗の再解釈がなされた。今村は、ハワイにおける浄土真宗開教に尽力した本願寺派の僧侶である。彼はハワイ開教を進めるにあたり、仏教をアメリカの文化や風潮に沿って変容させ、一種の「アメリカ仏教」を確立したと考えられる。日本仏教は、アメリカが第一次世界大戦に参戦してから始まったアメリカニゼーションの運動の渦中においてアメリカ社会から批判を受け、相応の態度が求められた。今村が試みたようにアメリカ的なものを取り入れて教団の基盤とすることは、アメリカ社会、文化、国民に即した浄土真宗のあり方を考えたことであり、南米においても今後伝道していく上で必要であると考ええる。ブラジル人としてのアイデンティティを持つた人がブラジルの社会、文化、国民に即した伝道をしなければ、今後ブラジルでの浄土真宗の興隆は見込まれないだろう。多様な文化的、宗教的背景を持ちながらカトリックの風潮の中で生活する人々に伝道するとなると、ブラジル社会に関する深い理解が必要となるのではないだろうか。

第二節 ブラジル以外の南米開教区

ブラジル以外の南米の国にも浄土真宗の寺院は存在しているが、情報が少なく、その詳細を明らかにすることは出来なかった。だが、『憶若』によると、浄土真宗本願寺派はアルゼンチンの首都、ブエノスアイレスに寺院を構えているが、当時のアルゼンチンでは宗教法人が認められていなかったため、運営が不安定な状態であることが述べられている。³² 加えて、アルゼンチンはブラジルと比較するとヨーロッパ移民、特に白人の占める割合が高く、同じ南米であってもブラジルとは異なる開教を行う上での困難さがあつたと考えられる。アルゼンチンも

ブラジルと同じく移民国家であるが、渡ってきた移民のほとんどをヨーロッパ系が占めており、現在も白人の割合が非常に高い。このことから、ブラジルとは国民性が大きく異なると考えられる。この先、白人社会でアルゼンチンの公用語であるスペイン語を用いて伝道を行うとなると、よほどスペイン語と仏法、そしてアルゼンチンの社会や文化に即して伝道を行う必要があるだろう。白人社会ということは、日本人や日本の仏教の立ち位置もブラジルと異なる部分があると考えられる。そして、日本人移民の数がブラジルよりも少数であることから、浄土真宗だけではなく日本仏教各宗派の興隆はブラジルよりも見られなかったのではないだろうか。

またペルーにも寺院があつたとされるが、この点に関しては不明である。前章でも述べたように、ペルーは日本で南米移民事業が始まった際、南米諸国の中で最初に移民が送られた国である。ペルーに日本仏教が渡った経緯は、移民の中に浄土真宗の僧侶がいたことである。その僧侶が移民の有志と共に、寺院を一九〇八年に設立した。浄土真宗本願寺派は二回目の移民移送の際にペルーでの開教を計画したが、実現しなかった。日本仏教の他宗派はこの際、移民取扱業者から要請を受けて曹洞宗、浄土宗の僧侶が渡航した。この時渡った移民は真宗信仰の篤い地域出身の者が多かったため浄土真宗本願寺派の僧侶の渡航が望ましかったが、布教活動が広がることによる排日を恐れ、他宗派に派遣を要請したとされる。³³やがてペルーで曹洞宗の寺院が設立されたが、日本移民政策を推進していた政権が崩壊したことにより国内での排日機運が高まったため、ブラジルのような仏教活動は見られなかった。浄土真宗本願寺派の布教においても正式な開教区の開設はされることなく、在家信者を中心とする法話会が行われる程度であつた。現在もペルーには開教地・開教地区は存在していない。

今後の伝道を考える上では、アルゼンチンやブラジルは同じ南米開教区であり、言語が似ていても、国の成り立ちや国民の宗教観に相違があるため、ブラジルとは異なる課題が見られるのではないかと考える。南米開教区全体で伝道を考えるならば、国によって実情が異なる点を留意する必要があるだろう。

第三章 ブラジルの宗教と浄土真宗

第一節 ブラジルの宗教

元南米開教使に伺うと、現在南米開教区では、ボーイスカウトや仏教青年会を通して若者が仏教に触れる機会が設けられており、若者同士が友人を連れて寺院を訪れ、仏教徒ではない人でも仏教徒と同じ作法をする姿が見られたとのことである。³⁴だが、ポルトガル語の聖典が存在し非日系人の若者が寺院に足を運び所作を行なったとしても、実際にその寺院の門徒になることは極めて少ない。特に浄土真宗は非日系人への伝道が遅れており、ブラジルの日系社会の中で築かれてきた浄土真宗は非日系人への定着が難しいだろう。よって、浄土真宗をどのようにしてブラジルの人々にアプローチしていくのかという課題がある。北米のように坐禅、メデイテーション、チベット仏教のような形として実践する方法を試み、それを浄土真宗への入り口として位置付けることも一つの方法ではあるが、本義を忘れた伝道になってしまうことのないようにという、教化の場での葛藤が生じていることは事実である。先述したように、ブラジル人は宗教に対して寛容な態度であり、関心は持っている。「自分は無

宗教だから関係ない」と宗教に対して無関心になるのではなく、畏敬の念を持っていることを元南米開教使に伺った。³⁵ブラジル人の宗教感覚に関して、文化人類学者の中牧弘允（一九四七〜）は、様々な食材を混ぜて造られるブラジルの代表的料理のフェイジョーダに喩えている。³⁶実際にポルトガル語での伝道を早い段階から行なった生長の家や創価学会などの新宗教の宗派は、多くの非日系人（現地のブラジル人）の信者を多く持ち、日本の新宗教だけでなく、チベット仏教や禅宗においても、ブラジルで新たな実践方法を確立しつつあり、若者もそれに参加している。

日本に寺院がどこの市町村にもあるように、ブラジルでは大小様々なカトリックの教会が至る所に存在しており、街の中心部には大聖堂が建てられている。元々キリスト教カトリックを国教としていたブラジルで、浄土真宗の教えを伝えていくため、開教使たちは日々模索している。

ブラジルでは、各宗教団体が社会問題や国の政策に対する団体としての立場を標榜することがある。例を挙げると、中絶やLGBTQなどの問題に対して政治の場面で宗教団体が意見を述べるケースがある。浄土真宗もこのような問題に対して意見を標榜してもよいのではないだろうか。ブラジルにおける伝道は、近年プロテスタントの信者が増加してきたことを踏まえ、ヨーロッパで行われている浄土真宗の活動を参考として検討してみることも、現代の南米における伝道の一つのあり方なのではないかと考える。増加しているプロテスタントの伝道にも目を向け、なぜ信者が増加しているのかを検討することを今後の課題とする。

第二節 浄土真宗とキリスト教における救済

次章で今後の真宗伝道の可能性を述べるにあたり、ここでは浄土真宗とキリスト教では救済がどのように説かれているのかについて述べる。浄土真宗における伝道は、「如来（弥陀）の人間観（世界観）とその救済法を表現し伝達すること」³⁷であり、特に海外伝道を行うにあたっては、救済法を現地の状況に合わせて説いていくことが求められていると考えられる。

はじめに、浄土真宗における救済について述べる。浄土真宗における救済は、主に『大経』四十八願の中の第十八願に表されている。第十八願は、「説我得仏 十方衆生 至心信樂 欲生我国 乃至十念 若不生者 不取正覺 唯除五逆 誹謗正法」³⁸とある。この願は衆生を浄土に往生せしめる因を誓われた願³⁹であり、ここでの救済の対象は一切衆生である。特に衆生の中でも悪人こそ救済の対象であることが親鸞の著作の中で述べられている。⁴⁰その中の悪人に対する救済に対して、『一念多念文意』には「凡夫はすなはちわれらなり」⁴¹、「凡夫といふは、無明煩惱われらが身にみちみちて」⁴²とあり、私たち人間が煩惱に溢れた凡夫であることが記されている。阿弥陀仏は私たち凡夫に対して「唯除五逆 誹謗正法」と、「五逆を犯し、仏法を誇る」罪深い存在であることを示し、そのような悪をいましめていた。また、これからそのようなことをせぬよう知らしめている。と同時に、これらの罪を犯す可能性を持っている人間に対してそのような者こそ救うという大慈大悲のはたらきが表されている。また、浄土真宗において重要な第十八願の中心は信心の内実である至心・信樂・欲生の三心である。

⁴³至心・信樂・欲生は、それぞれ第十八願の一切衆生を平等に浄土に生まれさせたいという阿弥陀仏の誓いが真

実であること、如来が衆生を名号によって助けることに疑いがないということ、そしてこの誓いの名号を信ぜよとすすめ、これによって浄土に生まれることができるから安心せよという仰せである。これらの三心は親鸞の教義において、第十八願の誓いの名号にまかせよという信樂一つで往生が定まるといわれている。

第十八願成就文には「聞其名号 信心歡喜」⁴⁴とあり、この「聞」は『一念多念文意』に「きくといふは信心をあらはす御のりなり」⁴⁵とあることから、阿弥陀仏の本願である名号を疑いなく聞き受けることがそのまま信心となることが表されている。この信心とは「如来よりたまはりたる信心」⁴⁶であり、衆生から起こす信心ではない。よって、救われる側が力を入れて信じよう意識して信じようとするものではなく、信心そのものも如来の大悲のはたらきによってたまわるものである。この信心における救済の対象は悪人である。阿弥陀仏はこの煩惱具足の悪人に対して、信じ称名するものを必ず救うということを南無阿弥陀仏の名号として我々に喚びかけ、知らしめている。浄土往生に対して自らのほからいではどうすることもできず、いずれの行も及び難い悪人に対し、阿弥陀仏の修行によって成就された本願力の名号によってのみ、衆生は救われると説かれる。

一方、浄土真宗の救済の対象が一切衆生であったのに対して、キリスト教における救済の対象は神の意思に背いた「原罪」を持っている人間である。元々神は、人間を善なるものとして創造したが、原罪によって悪と不幸を招いたとみる。⁴⁷また、神は創造した人間に対して、人間が人間以外の他の被造物、すなわち自然界の動物を支配できるとした。人間は神になることは出来ないが、神に最も近い存在とされた。聖書学者の船本弘毅（一九三四～二〇一八）は、『キリスト教入門五 キリスト教と現代』の中で、人間について「地上においては万物の長

として造られているのである。」⁴⁸と述べている。神に最も近い存在であった人間は罪⁴⁹を犯したと聖書に述べられており、この罪を犯した人間を救済の対象としている。神が人間に対して救済を成就しようとするが、人間と神は被造物と創造主というように本質的に異なるものである。そのため、神が人間を救いたいという慈悲や救済を知らしめるために、神はイエス・キリスト（以下、「イエス」と記す）を神と人間の媒介者とした。イエスは神の子で、人間として生まれながらも神の意思に従順であった。神は人間の罪をイエスに負わせ、十字架の上にならせて人間を救おうとした。イエスが死んだことによって神と人間は和解したことになるという。⁵⁰このことを信じる者には、神の愛の働きである聖霊によって神に対する信順する心が与えられる。それによって人間は原罪の支配下にはなく、罪から解放されたものであることを聖霊のはたらきによって知らされ、救済が成就する。

以上のように、浄土真宗では救済における全ての過程が阿弥陀仏のはたらきによってなされる。キリスト教では神による救済に対するはたらきに加えて、救われる側の信仰と善行のはたらきが特にカトリックの救済において必要であると考えられる。

また、浄土真宗では阿弥陀仏の光明によって自らが照らされ、自分のはからいではどうすることもできない悪人であることが知らされる。光明とは阿弥陀仏の智慧のことであり、それに照らされることで自らの姿が知らされる。キリスト教では、神によって創造された一番初めの人間であるアダムが神に背いたことによって、人間そのものが原罪を持っていると考えられる。これは聖書に記されており、聖書の言葉に触れることによって自らが原罪を負っていることを知る。浄土真宗・キリスト教ともに罪があることに気づき、阿弥陀仏・神の慈悲とそれぞ

れの救済の働きを信じ、生活する。浄土真宗では念仏、キリスト教では善行を生活の中で行う。この生活の部分は浄土真宗とキリスト教において異なる部分があると考えられる。浄土真宗の生活は、教章（私の歩む道）の生活の箇所によると、

親鸞聖人の教えにみちびかれて、阿弥陀如来のみ心を聞き、念仏を称えつつ、つねにわが身をふりかえり、慚愧と歡喜のうちに、現世利祈祷などにたよることなく、御恩報謝の生活を送る。⁵¹

と述べられている。『浄土真宗の教章（私の歩む道）』を理解するために』によると、具体的な浄土真宗の信仰生活は「聴聞」と「念仏」であり、生活実践であると述べられている。「聴聞」は、先述したように阿弥陀仏より名号として喚びかけられていることだけでなく、なぜ本願の名号が与えられ、聞かされているのかという仏願の生起本末をよく聞くことである。「念仏」は、称名念仏のことである。阿弥陀仏の、一切衆生を必ず往生させるといふ願いが成就されたものが南無阿弥陀仏という名号となっている。この名号を背負称えるのが称名念仏であり、私たちから仏に祈るものではなく仏の方から衆生へと喚びかけられているものであることを踏まえた上で念仏を称え、これを聞くことが聞名である。また衆生の称名は仏恩に対する報恩感謝の念仏ともいわれるのである。

キリスト教の生活は神中心であり、神の意思に基づいて道徳的に清く生きようと励む。⁵² 神を愛し、神によって創造された人間を愛し、神の栄光をあらわすために生きることが求められている。人を愛するということは、神の愛を受けている人間同士が互いに愛することが求められているということである。

キリスト教から浄土真宗に帰依したジャン・エラクル（一九三〇～二〇〇五）は、自身の著作の中でキリスト

教の日常生活について述べている。それによると、キリスト教の生活において隣人愛を実践しようとする不寛容に陥り、精神の窒息を招くということ述べている。⁵³この点にも違いが見うけられる。浄土真宗では悪人であることを自覚し、日々我が身を振り返りながら報恩報謝の生活を送るのに対し、キリスト教では自らが神によって創造され、愛されている自己を受容し、他者を愛する生活を送ろうとするのである。ここでの他者を愛する生活とは、見返りを求めず、ただ他の幸福を願うことである。また以前、私が非仏教徒のアメリカ人と話した際、日本の仏教の教えについての話題になった。その中で浄土真宗と禅宗について話した際、彼が「坐禅は、忙しい現代人にとって日常生活でする時間がないのではないだろうか。生活の中で生きてくるのが浄土真宗だと思うから、忙しい現代に生きる私たちにとって浄土真宗の教えは合っているのではないか？」と言っていた。また彼は、坐禅が日常生活から離れる営みであるのではないかという見解も持っていた。

以上を踏まえ、キリスト教を基盤として暮らしているブラジルの人々ほどのような疑問を持っているのだろうかという疑問が生じた。このことについて現役南米開教使に伺うと、キリスト教教義の世界観に対する疑問があるということだった。⁵⁴キリスト教、特にカトリックでは二〇二三年十二月十八日まで同性愛が認められていなかった。同性愛者同士のカップルはこの日に認められたが、教義上、結婚は男女間のみ認められるということに変更はないとした。⁵⁵このような教義の問題に対して彼らは疑問を示していると考えられる。ブラジルの人々は宗教の教えに触れた時、自己批判よりも「社会的にどうなのか」ということを考えやすい。浄土真宗は自身を振り返りながら報恩報謝の生活を送る宗教であるから、日常生活に結びつけやすく、生活の中で生きてくる教えで

はないだろうか。この部分を重点的に伝える必要があると私は考える。

第四章 南米における伝道

第一節 現在行われている南米開教

今章で南米における伝道を考察するにあたり、先述したようなキリスト教観が、元々国教がキリスト教であった南米に根付いていることを承知しておかなければならない。なぜなら、浄土真宗とキリスト教には幾つかの類似点・相違点がみられ、これらを明示しなければ浄土真宗を伝道する意義が希薄になるからである。また、「信じる」という面では自身の力で信じるということではなく、浄土真宗ではそのはたらきが阿弥陀仏によってなされているものであることを伝えなければ、自力に依ってしまいかねない。現地の歴史と教義を踏まえた上で、これからの浄土真宗の南米開教にはどのような課題が見られるのだろうか。

現在の南米開教区の現状を、他の海外開教区も踏まえて述べる。昨今の北米の伝道場においては、現地の非日系人を中心に「メデイテーションや坐禅をしているか」と問い合わせがあった時の対応をカナダの開教使に伺った。^{5,6}このような場合に、「浄土真宗の教義において坐禅やメデイテーションは存在しないから自分の寺院では行なっていない」と答えると仏教に関心を持つ人がいなくなってしまうのです、との話を聞いた。私はその際、真宗で坐禅やメデイテーションを行うことは、浄土真宗の教義と離れてしまう可能性があるからすべきではない

と考えていた。しかし、坐禅を組む時間やメデイーションとして座ったまま静かに自分自身を振り返る時間を取り、その時間が終わり次第、仏教や真宗の教えに触れてもらう時間を作るという方法もあることを北米開教区の開教使に聞いた。⁵⁷またブラジルの寺院においても、柔道などの日本文化に触れることを仏教への入り口としていることを南米開教使に聞いた。⁵⁸人々が持っている日本文化や仏教のイメージを受け入れた上で、浄土真宗に触れる機会を作ることが、海外の場においては大切であると考ええる。

そして、海外開教区を含む全体の問題として、寺院存続の問題がある。北米開教区の元開教使は、浄土真宗に触れたことのない人に対して積極的に布教を行おうとしているのではなく、現時点でのご門徒をつなぎ止めようとしているだけだ。⁵⁹ということをやや批判的に述べていた。また、この現状は日本の寺院においても見られるものだと考えられる。特に近年、日本人の宗教離れは以前より顕著な傾向であることをよく耳にする。ここでは詳述はしないが、家族形態、地域の変化や少子高齢化などから寺院の存続が懸念されている。特に南米開教区における浄土真宗教団は、日本人移民の歴史に合わせて変容を遂げてきており、移民宗教、移民仏教として日系人への仏事や布教活動を中心に行ってきた。しかし、現在では、現地で生まれ育った日系人、非日系人に即した浄土真宗のあり方で活動を行なっていくことが求められている。

特にブラジルアヤリオ・デ・ジャネイロの都市部の寺院のメンバーは、ほぼ非日系が占めており、このような大都市における伝道が遅れていることを元南米開教使に伺った。⁶⁰元南米開教使によると、南米開教区では北米、ハワイのようなメンバーシップの制度が整備されておらず、先述したように、「花まつり」などの行事や日曜

礼拝などには来寺するが、メンバーとしての定着がなかなか見られないという。浄土真宗のみならず、日本仏教はこれまで日系人に対する伝道を中心に行ってきたため、ブラジルでブラジル人自身の宗教の選択肢に仏教が介入したのは近年になってからである。日系にルーツのある人だけでなく、非日系の人に伝道を行うには、ポルトガル語を駆使し、日系社会という民族的な共同体の枠を超えてゆかなければならないだろう。これまで日系人という民族が維持してきた日本仏教を非日系人によって維持するためには、ブラジルの社会基盤に合わせたあり方が必要ではないだろうか。日系人にルーツのある人でも仏教への定着はあまり見られなくなってきている。今や日本人移民の子孫は、ブラジル人としてのアイデンティティを持っている。彼らに浄土真宗のみ教えを伝える際、どのような可能性が考えられるのだろうか。

第二節 今後の南米伝道とその課題

元南米開教使に伺うと、ブラジルでは先述したように人種差別そのものが罪であり、自身が開教使として駐在していた時も差別を感じたことはなかったようである。⁶¹また、仏教だけでなく宗教に対する抵抗が老若男女間わず見受けられないことを聞いた。仏教自体がマイノリティとなりうる海外において、仏教に限らず各々の宗教心を大切にしているブラジルでは、受容という面においては問題がないように見える。しかし、国内で差別がなく、人々が宗教心を大切にしているからといって浄土真宗の教えが伝わりやすいということとは言えず、このような状況であるが故の課題もあるという。ブラジル人はカトリックを基盤とし、「みんな神の子」であるから、助け合

おうという気質、そしてカトリックのマリア信仰を基盤とした母性的な国民性があるのではないかということ。元南米開教使は述べていた。⁶²浄土真宗本願寺派前御門主の特別講義の資料⁶³によると、「浄土真宗のみ教えが現実の生き方と実際に、かみあっているのか、浄土真宗の救済、信心にめぐまれた人生とはどういうものなのかを明らかにしなければならぬ」とあった。このことを伝えていくには、まず方法として考えるべき点が多くある。浄土真宗の教えを伝える機会があった際、教義を前面に押し出していくことよりも、人々が日々抱えている心の問題に対して、真宗における救済とはどのようなものを明示する必要があると考える。南米の様々な文化や人々の考え、求めていることに即した伝道を試みる必要がある。宗教に寛容なブラジルだからこそ、浄土真宗の教えを積極的に開いていくべきではないだろうか。社会の状況だけでなく多様な文化、人種の生活様式、考え方を理解する必要があるため、日本やアメリカで伝道を行うよりもこの点は難しいものではないだろうか。

またアメリカ人は、宗教の教えが自分にどう影響を及ぼすのかということを開教使に尋ねるが、その答えが伝道場において準備されていないことが指摘されている。⁶⁴ブラジルでもこの傾向が見られ、どちらもただ救済について述べるだけではなく、浄土真宗の特色や良さを表すことが必要だろう。ブラジルにおいては、キリスト教との違いを明確にしなければ、似ているようなものなら昔から土壌となっているキリスト教でよい、となってしまうだろう。他宗教のことを悪く言うて比べるのではなく、一宗教・仏教としての浄土真宗を、様々なバックグラウンドを持つ人々を自由に平等に受け入れることができる教えとして伝えていくことができれば、ブラジルにおける浄土真宗の意義が確立するのではないだろうか。現在、ブラジルでは人口が増加しているにも関わらず

仏教徒数は減少しており、⁶⁵今後更に減少していくことが予想される。日系人間の宗教で終わってしまうということにならぬよう、どのように伝道していくべきかというより深い考察は今後の課題としたい。

結論

ここまで、海外伝道の、特に南米ブラジルにおける開教の実情とその課題について考察してきた。浄土真宗海外開教区の大部分を占める北米、南米はともに移民国家であり、多様なルーツを持った人が混在している。その中でもブラジルでは、多彩な人々や環境に即した柔軟な伝道方法が求められている。この具体的な方法は、実際に南米を訪れて考える必要があるが、北米と同様の海外開教区であっても基盤となっているキリスト教の宗派も異なり、国にいる人々の生活様式も大きく異なっている。それに応じた念仏とともにある生活とその念仏に具されている阿弥陀仏の信心を伝えていく必要がある。

浄土真宗における伝道は、これまで教義学を中心に行われてきた⁶⁶が、救済や生活する上で生きてくるものを現地に住んでいる人に即した形で伝えていかねばならない。浄土真宗に帰依する念仏者としての生活は、日常生活の中で「私は阿弥陀仏とともに生きている存在である」ということを自覚し、自らを振り返りながら生きていくことであると私は考える。そして、南米開教区だけでなく海外開教区における伝道は、日本で生じている間

題と類似している点があるとともに、海外特有の困難さもある。例えば、元南米開教使に伺うと、ブラジル人は現世利益を求める人が多いという。^{6,7}ここでいう現世利益とは、人間の欲求や欲望を満たすものである。浄土真宗における現世利益とは方向性が異なるため、それを求めてくる人に対して「浄土真宗には現世利益がある」と応えることは出来ない。人々がどのようなことを対象として現世利益と言っているのか、彼らの意向を踏まえた上で浄土真宗としてどういう対応ができるかを考えなければならない。そして、仏教は一体どのような意味合いで私たち衆生が迷っているかを示し、現世利益を求めることの元にある迷いへの自覚へと導く。そして、迷いに対して阿弥陀仏がどのように働きかけているのかを説き、人間の本来の問題に焦点を当てて応答することができるなら、生き方や生活に変化が生じるはずである。

今後の課題としては、従来取り組まれてきたように浄土真宗に触れる様々な機会を設けながら、ブラジル人の心の問題や迷いとは何かということへのアプローチを考えていくことが求められていると考える。浄土真宗の生活は、時間や場所を問わず、誰でも行うことができる称名念仏をすすめると共に我が身を振り返りながら仏法に触れ、報恩感謝の生活を送ることである。言葉や方法による伝道研究だけではなく、人間が抱えている悩みを考え、仏法を通して人々の心の荷が少しずつ降りることに導き、浄土往生の道を示すことができれば、そこに浄土真宗の意義があるのではないだろうか。

- 二〇二二（令和四）年九月二十八日（水）龍谷大学大宮学舎 東覺二〇二教室・オンラインで行われた浄土真宗本願寺派 カナダ開教区 開教総長 青木龍也氏による特別講演会の内容。
- 1 高橋幸春『日系人 その移民の歴史』九頁。
- 2 高橋幸春『日系ブラジル移民史』一三七頁。
- 3 高橋幸春『日系ブラジル移民史』一三八頁。
- 4 高橋幸春『日系人 その移民と歴史』一二二頁。
- 5 半田知雄『移民の生活の歴史―ブラジル日系人の歩んだ道―』六一―一頁。
- 6 前山隆『移民の日本回帰運動』一八七頁。
- 7 高橋幸春『日系ブラジル移民史』二七五頁。
- 8 常光浩然『日本仏教渡米史』三二―一頁。
- 9 中牧弘允『新世界の日本宗教―日本の神々と異文明―』四七頁。
- 10 中牧弘允『新世界の日本宗教―日本の神々と異文明―』三九頁。
- 11 半田知雄『移民の生活の歴史―ブラジル日系人の歩んだ道―』六九―一頁。
- 12 渡辺静波『憶若』私家本 三二、三三頁。
- 13 渡辺静波『憶若』私家本 三二、三三頁。
- 14 渡辺静波『憶若』私家本 三二、三三頁。
- 15 仏教タイムス社『仏教大年鑑』八六―八頁。
- 16 大乘淑徳学園長谷川仏教文化研究所『ブラジル南部在住日系人の意識調査報告書』一〇九―一一頁。
- 17 大乘淑徳学園長谷川仏教文化研究所『ブラジル南部在住日系人の意識調査報告書』一〇九頁。
- 18 大乘淑徳学園長谷川仏教文化研究所『ブラジル南部在住日系人の意識調査報告書』一〇九―一一頁。
- 19 半田知雄『移民の生活の歴史―ブラジル日系人の歩んだ道―』七―一六頁。
- 20 渡辺静波『憶若』私家本 二、三頁。
- 21 渡辺静波『憶若』私家本 二、三頁。
- 22 渡辺静波『憶若』私家本 二、三頁。
- 23 仏教大年鑑刊行会『仏教大年鑑』昭和36年版一〇八頁。
- 24 真宗大谷派南米開教監督部『南米開教35年誌』三頁。
- 25 真宗大谷派南米開教監督部『南米開教35年誌』四頁。

- 2 6 仏教大年鑑刊行会『仏教大年鑑』昭和36年版一〇八頁。
- 2 7 長谷川良信『長谷川良信全集 第3巻』、『長谷川良信全集 第4巻』。
- 2 8 平野植民地日本人会『平野廿五周年史』三〇、三一頁。
- 2 9 原田亮裕 編『高階瓏仙禅師伝』〈抄録〉二七七、二七八頁。
- 3 0 中牧弘允『新世界の日本宗教―日本の神々と異文明―』五五頁。
- 3 1 中牧弘允『新世界の日本宗教―日本の神々と異文明―』五九頁。
- 3 2 渡辺静波『憶若』私家本 四六頁。
- 3 3 中西直樹『仏教海外開教史の研究』八一頁。
- 3 4 元南米開教使の今井慶哉氏に話を伺った。
- 3 5 元南米開教使の今井慶哉氏に話を伺った。
- 3 6 中牧弘允『新世界の日本宗教 日本の神々と異文明』二〇四、二〇五頁。
- 3 7 深川宣暢『真宗伝道学研究序説』五四頁。
- 3 8 教学伝道研究センター 編『浄土真宗聖典全書(一) 三経七祖篇』二五頁。
- 3 9 仏教文化研究会 編『親鸞と現代 第一集』六一頁。
- 4 0 この部分は、歎異鈔第三条に述べられている。(浄土真宗本願寺派総合研究所『註釈版』六二七頁)
- 4 1 浄土真宗本願寺派総合研究所『註釈版』六九二頁。
- 4 2 浄土真宗本願寺派総合研究所『註釈版』六九三頁。
- 4 3 稲城選恵『聖典セミナー 浄土三部経―無量寿経―』一〇九頁。
- 4 4 教学伝道研究センター 編『浄土真宗聖典全書(一) 三経七祖篇』四三頁。
- 4 5 浄土真宗本願寺派総合研究所『註釈版』六七八頁。
- 4 6 浄土真宗本願寺派総合研究所『註釈版』八五二頁。
- 4 7 矢内原忠雄『キリスト教入門』九七頁。
- 4 8 船本弘毅『キリスト教入門5 キリスト教と現代』十五頁。
- 4 9 ここでの「罪」とは人間の始祖が犯した原罪のことと考えられている。人類最初の女性とされるイブが、神が食べることを禁止した木の実を、蛇の誘惑によって人類の最初とされるイブの夫アダムと食べたことから原罪の話が始まるとされている。(大貫隆、名取四郎、宮本久雄、百瀬文晃 編『岩波 キリスト教辞典』一五〇、三七二頁)
- 5 0 久米博『ワードマップ キリスト教 その思想と歴史』七四頁。
- 5 1 浄土真宗本願寺派ホームページ 宗門基本情報 <https://www.hongwanji.or.jp/info/> (2023.12.5 閲覧)

- 5 2 矢内原忠雄『キリスト教入門』一一七頁。
- 5 3 ジャン・エラクル 金児慧訳『十字架から芬陀利華へ…真宗僧侶になった神父の回想』四四、四五頁。
- 5 4 ブラジリア本願寺開教使の土井慶造氏に話を伺った。
- 5 5 朝日新聞デジタル <https://www.asahi.com/articles/ASRDM75TPRDMUHHI033.html> (2023.12.10 閲覧)
- 5 6 二〇二二(令和四)年九月二八日(水)龍谷大学大宮学舎 東覺二〇二教室・オンラインで行われた浄土真宗本願寺派 カナダ開教区 開教総長 青木龍也氏による特別講演会の内容。
- 5 7 二〇二三(令和五)年十二月十四日(木)龍谷大学大宮学舎 清和館三階ホールにて行われた、龍谷大学大学院実践真宗学研究科公開シンポジウムにて、浄土真宗本願寺派北米国仏教団オレンジ郡仏教会開教使ワンドラ睦氏による発表。
- 5 8 二〇二三(令和五)年十二月十四日(木)龍谷大学大宮学舎 清和館三階ホールにて行われた、龍谷大学大学院実践真宗学研究科公開シンポジウムにて、浄土真宗本願寺派南米教団ブラジリア本願寺開教使 土井慶造氏による発表。
- 5 9 松本デービッド、川添泰信、那須英勝『犀の角―世界に拓く真宗伝道―』一四七頁。
- 6 0 元南米開教使の今井慶哉氏に話を伺った。
- 6 1 元南米開教使の今井慶哉氏に話を伺った。
- 6 2 元南米開教使の今井慶哉氏に話を伺った。
- 6 3 二〇一三年七月三日(水) 特別講義 「実践真宗学研究科に期待すること」の資料。
- 6 4 松本デービッド、川添泰信、那須英勝『犀の角―世界に拓く真宗伝道―』四二二頁。
- 6 5 フランク・ウサルスキー 今井慶哉訳「ブラジルにおける「黄色い」仏教の衰退」、『中央仏教学院紀要』二一、四四頁。
- 6 6 深川宣暢『真宗伝道学研究序説』四七頁。
- 6 7 元南米開教使の今井慶哉氏に話を伺った。

参考文献

書籍

- 井上円了著・網代照隆編『明治四十五年度 布教研究会講義録』一九一二年、『仏教海外開教史資料集成 南米編 第二卷』不二出版社、二〇〇九年に収録】
- 本派本願寺布哇開教教務所文書部編『本派本願寺布哇開教史』一九一八年、『仏教海外開教史資料集成 ハワイ編 第一卷』不二出版社、二〇〇八年に収録】
- 今村恵猛著・山田将為編『米国の精神を論ず』一九二一年、『仏教海外開教史資料集成 ハワイ編 第三卷』不二出版社、二〇〇八年に収録】
- 野田良治『實查十八年ブラジル人國記』博文館、一九二六年
- 松宮石丈『うかつに行けない南米』一九二七年、『仏教海外開教史資料集成 南米編 第二卷』不二出版社、二〇〇九年に収録】
- 松宮征夫 編（抄録）『松宮石丈還暦記念 落穂籠』一九三四年、『仏教海外開教史資料集成 南米編 第二卷』不二出版社、二〇〇九年に収録】
- 布哇ホノルル本願寺編『超勝院遺文集』一九三七年、『仏教海外開教史資料集成 ハワイ編 第三卷』不二出版社、二〇〇八年に収録】

青柳郁太郎『ブラジルに於ける日本人發展史 上巻』ブラジルに於ける日本人發展史刊行委員会、一九四一年

平野植民地日本人会『平野廿五周年史』一九四一年、『仏教海外開教史資料集成 南米編 第二卷』不二出版社、二〇〇九年に収録】

南米仏教研究会『伯国仏教読本』〈抄録〉、一九五六年、『仏教海外開教史資料集成 南米編 第二卷』不二出版社、二〇〇九年に収録】

ブラジル仏教徒協議会 編『伯国仏教篤信功労者名鑑』一九六〇年、『仏教海外開教史資料集成 南米編 第一卷』不二出版社、二〇〇九年に収録】

常光浩然『日本佛教渡米史』佛教出版局、一九六四年

大谷智子『再びブラジルを訪れて』一九六七年、『仏教海外開教史資料集成 南米編 第三卷』不二出版社、二〇〇九年に収録】

仏教タイムス社 編『仏教大年鑑』仏教タイムス社、一九六九年、『仏教海外開教史資料集成 南米編 第一卷』不二出版社、二〇〇九年に収録】

半田知雄『移民の生活の歴史…ブラジル日系人の歩んだ道』サンパウロ人文科学研究所、一九七〇年

矢内原忠雄『キリスト教入門』角川書店、一九七〇年

C・フルタード「著」…水野一訳『ブラジル経済の形成と発展』新世界社、一九七一年

原田亮裕編『高階』〈抄録〉一九七四年、『仏教海外開教史資料集成 南米編 第三卷』不二出版社、二〇〇九年に収録】

仏教文化研究会 編『親鸞と現代 第一集』春秋社、一九八〇年

前山隆『移民の日本回帰運動』日本放送出版協会、一九八二年

浄土宗開教振興協会『開教』〈抄録〉一九八三年、【『仏教海外開教史資料集成 南米編 第三卷』不二出版社、二〇〇九年に収録】

渡辺静波『憶若』〈私家本〉一九八四年、【『仏教海外開教史資料集成 南米編 第二卷』不二出版社、二〇〇九年に収録】

中牧弘允『新世界の日本宗教―日本の神々と異文明―』平凡社、一九八六年

ハーバード大学シンポジウムと米国東部研修旅行団編―アメリカの宗教を訪ねて編集係『アメリカの宗教を訪ねて―ハーバード大学シンポジウムと米国東部研修旅行』一九八六年

工藤義修『南米開教史話―南十字星下の思い出』一九八七年、【『仏教海外開教史資料集成 南米編 第二卷』不二出版社、二〇〇九年に収録】

真宗大谷派南米教団『南米開教35年誌』真宗大谷派南米教団、一九八七年、【『仏教海外開教史資料集成 南米編 第三卷』不二出版社、二〇〇九年に収録】

仏教伝道教会『南米開教史話』仏教伝道教会、一九八七年

中牧弘允『日本宗教と日系宗教の研究―日本・アメリカ・ブラジル―』刀水書房、一九八九年

国分敬治著『キリスト教と浄土真宗』法蔵館、一九八九年

土居真俊『親鸞とキリスト教…土居真俊対話集』法蔵館、一九九〇年

大乘淑徳学園長谷川仏教文化研究所『ブラジル南部在住日系人の意識調査報告書』大乘淑徳学園長谷川仏教文化研究所、一九九〇年

ブラジル日本移民80年史編纂委員会『ブラジル日本移民八十年史』移民80年祭祭典委員会、一九九一年

ジャン・エラクル著…金児慧訳『十字架から芬陀利華へ…真宗僧侶になった神父の回想』国際仏教文化協会、一九九二年

大谷大学真宗総合研究所『海外における仏教研究の方法と課題』大谷大学真宗総合研究所、一九九三年

高橋幸春『日系ブラジル移民史』三一書房、一九九三年

小池洋一、西島章次『ラテンアメリカの経済』新評論、一九九三年

岩下壮一「著」、稲垣良典校訂『カトリックの信仰』講談社、一九九四年

梯實圓『聖典セミナー「歎異鈔」』本願寺出版社、一九九四年

G・アンドラーデ、中牧弘允『ラテンアメリカ宗教と社会』新評論、一九九四年

高田慈昭『オブリガード 南米開教体験記』百華苑、一九九六年

武田龍精『親鸞とアメリカ…北米開教伝道の課題と将来』龍谷大学仏教文化研究所、一九九六年

高橋幸春『日系人 その移民の歴史』三一書房、一九九七年

武田龍精『北米開教区』龍谷大学仏教文化研究所、一九九七年

- 船本弘毅『キリスト教入門5 キリスト教と現代』日本基督教団出版局、一九九七年
- 水野一、西沢利栄『ラテンアメリカの環境と開発』新評論、一九九七年
- 至徳・A・ペール『浄土真宗とキリスト教』国際仏教文化協会、一九九八年
- 江本忍『いのちの夜明け…ブラジル・念仏布教の旅』樹心社、一九九八年
- 土岐慶哉訳『ハワイ開教小史…ハワイ本派本願寺』百華苑、一九九九年
- 稲城選恵『聖典セミナー 浄土三部経「無量寿経」』本願寺出版社、一九九九年
- 守屋友江『アメリカ仏教の誕生…二〇世紀初頭における日系宗教の文化変容』現代史料出版、二〇〇一年
- 伝道部『法縁.. 勝如上人ご巡教記録』本願寺出版社、二〇〇一年
- 小高毅『よくわかるカトリックとその信仰と魅力』教文館、二〇〇二年
- 大貫隆、名取四郎、宮本久雄、百瀬文晃 編『岩波 キリスト教辞典』岩波新書、二〇〇二年
- 長谷川良信「著」…長谷川匡俊監修『長谷川良信全集 第3巻』日本図書センター、二〇〇四年
- 長谷川良信「著」…長谷川匡俊監修『長谷川良信全集 第4巻』日本図書センター、二〇〇四年
- 浄土真宗本願寺派総合研究所『浄土真宗聖典（註釈版 第二版）』本願寺出版社、二〇〇四年
- 原口尚彰『信じることと知ること―新しいキリスト教概説―』東北大学出版会、二〇〇五年
- 松本デービッド、川添泰信、那須英勝『犀の角―世界に拓く真宗伝道―』永田文昌堂、二〇〇五年
- 久米博『ワールドマップ キリスト教 その思想と歴史』新曜社、二〇〇五年

横手征彦、金承哲『キリスト教の世界―大学生のためのキリスト教入門』学術図書出版社、二〇〇五年

浄土真宗本願寺派国際部、浄土真宗本願寺派アジア開教史編纂委員会編『アジア開教史…浄土真宗本願寺派 = The

history of propagation in Asia Jodo Shinshu Hongwanji-ha』本願寺出版社、二〇〇八年

梯実圓『聖典セミナー 教行信証 信の巻』本願寺出版社、二〇〇八年

ケネス田中『アメリカ仏教…仏教も変わる、アメリカも変わる』武蔵野大学出版会、二〇一〇年

教学伝道研究センター編『浄土真宗聖典全書（一）三経七祖篇』本願寺出版社、二〇一一年

富増章成『図解 世界一わかりやすいキリスト教』中経出版、二〇一二年

中西直樹『仏教海外開教史の研究』不二出版、二〇一二年

浄土真宗本願寺派 総合研究所『Namo Amida Butsu ～世界に響くお念仏～』本願寺出版社、二〇一三年

龍谷大学大学院『真宗伝道学の基礎的研究とアメリカ真宗伝道の実践的研究…龍谷大学大学院真宗伝道学 IBS(仏

教大学院)セミナー』二〇一三年

浄土真宗本願寺派総合研究所教学伝道研究室「聖典編纂担当」編纂『浄土真宗辞典』本願寺出版社、二〇一三年

日本国際文化学会年報編集委員会編・『「特集」ラテンアメリカの移民文化を語る』風行社、二〇一四

龍谷大学世界仏教文化研究センター編『研究活動報告書…龍谷大学世界仏教文化研究センター』龍谷大学世界仏教

文化研究センター』二〇一五年

中西直樹、吉永進一『仏教国際ネットワークの源流…海外宣教会（1888年～1893年）の光と影』三人社、

二〇一五年

宇佐見耕一・菊池啓一・馬場香織『ラテンアメリカの市民社会組織…継続と変容』アジア経済研究所、二〇一六年

田代俊孝『親鸞思想の再発見―現代人の仏教体験のために―』法藏館、二〇一六年

オリヴィエ・ダベールヌ、フレデリック・ルオー著…太田佐絵子訳…オレリー・ボワシエール地図製作『地図で見るラテンアメリカハンドブック』原書房、二〇一七年

村上速水『親鸞教義とその背景』永田文昌堂、二〇一九年

那須英勝、本多彩、碧海寿広『現代日本の仏教と女性…文化の越境とジェンダー』（龍谷大学アジア仏教文化研究叢書）『法藏館、二〇一九年

大田利生・岡村喜史・清岡隆文『救いの源流 浄土真宗の教えと本願寺』本願寺出版社、二〇二〇年

渡邊利夫『国際政治のなかの中南米史…実体験を通してリアリズムで読む』彩流社、二〇二一年

深川宣暢『真宗伝道学研究序節』永田文昌堂、二〇二二年

山田睦男・鈴木茂『ブラジル史』山川出版社、二〇二二年

ケネス・タナカ『目覚めるアメリカ仏教』武蔵野大学出版会、二〇二二年

松田真希子、中井精一、坂本光代『「日系」をめぐることばと文化…移動する人の創造性と多様性』くろしお出版、

二〇二二年

羽田信生『アメリカで真宗を学ぶ…親鸞聖人の「三願転入」とアメリカ人の真宗理解…大垣真宗学院上山研修講義聴記』方丈堂出版、二〇二二年
鍋島直樹・貴島信行・黒川雅代子・玉木興慈・那須英勝・森田敬史 他『仏教・親鸞浄土教を機軸とした宗教実践と社会实践の研究』方丈堂出版、二〇二三年

論文

渡辺雅子「転換期を迎えたエスニック・チャーチーブラジル日系社会における伝統仏教の模索」『研究所年報／明治学院大学社会学部附属研究所編』三四、二〇〇四年

坂東照哲「ブラジルにおける日本既成仏教団の開教事情」『言語文化学会論集』二八、二〇〇七年

イシカワ、エウニセ・アケミ「日本の記憶」と「ブラジルの記憶」…日系ブラジル人のアイデンティティ

『Quadrante : クアドランテ…四分儀…地域・文化・位置のための総合雑誌』二〇〇八年

嵩満也「浄土真宗本願寺派による初期ハワイ開教と非日系開教使の誕生」『国際社会文化研究所紀要』一〇、二〇〇八年

嵩満也「初期ハワイ本願寺教団と今村恵猛」『国際社会文化研究所紀要』一一、二〇〇九年

フランク・ウサルスキー、訳今井慶哉「ブラジルにおける“黄色い”仏教の衰退」『中央仏教学院紀要』二一、二〇一〇年

那須英勝 「現代アメリカ仏教徒の宗教観と真宗伝道の課題…ピュー・フォーラム「全米宗教実勢調査」に学ぶ」
『真宗学』一二三・一二四合併号、二〇一一年

葛野洋明 「真宗伝道の実践研究…国際伝道の実状から窺う」『真宗学』一二三・一二四合併号、二〇一一年

新田浩司 「政教分離と市民宗教についての法学的考察」『地域政策研究』一四、二〇一二年

葛野洋明 「浄土真宗における伝道活動の実践的研究…統計調査・実地調査を踏まえて」『真宗学』一二七、二〇一三年

嵩満也 「アメリカ仏教における白人仏教徒の系譜」『国際社会文化研究所紀要』一六、二〇一四年

今井慶哉 「ブラジルア本願寺「連邦区歴史文化財産」に指定」『中央仏教学院紀要』二七、二〇一六年

佐藤悦子 「ブラジル日系社会における人間形成と宗教実践に関する民族誌的研究」、東北大学機関リポジトリ、二〇一七年

葛野洋明 「国際伝道論研究の意義」『真宗学』一三七・一三八合併号、二〇一八年

ホームページ

浄土真宗本願寺派国際センターホームページ <https://international.hongwanji.or.jp/jp/> (2023.11.9 閲覧)

浄土真宗本願寺派（西本願寺）ホームページ宗門基本情報 <https://www.hongwanji.or.jp/info/> (2023.12.5 閲覧)